

二〇一八年三月
「倫理学紀要」第二十五輯 抜刷

ベルクソンにおける「夢」

—— 『物質と記憶』を中心に

中
原
真
祐
子

ベルクソンにおける「夢」——『物質と記憶』を中心に

中原 真祐子

はじめに

ひとは眠りについているとき、さまざまな夢をみる。夢にあらわれるイメージは、過去に経験したことの再現であったり、あるいは見たこともない光景であったりすることもしばしばある。起きてみると、なぜそんな夢を見たのか釈然としない思いを抱えつつも、強い印象だけがこつている——そうした経験をしたことがある人は少なくないだろう。夢は、その不可思議な性質のゆえに、錯乱や狂気といった正気を失う状態とともに、その存在や意味をめぐる古来様々な解釈を生んできた。

一九世紀半ばの西欧諸国にあつて、現代につながる脳神経学や心理学の萌芽が形成されてゆくなかで、夢や狂気といった問題領域も「科学的」な探究の対象となつてゆく。たとえばドイツにおいて、実験的手法を用いて人間の心理を解釈する、現代の心理学と連続的な「心理学」が確立していくのがこの時期である。¹隣国フランスにおいても、心霊研究、スピリチュアリズムの流れを経て、一九世紀後半、「無意識」の概念をめぐる思索が展開され、催眠状態や夢が重要な考察の対象となつてゆく。²そうした時代はやがて、一九〇〇年のフロイトの『夢

診断』をその嚆矢とする精神分析学という大きな潮流を生んでいくことになるだろう。

ベルクソン（一八五九―一九四二）はそうした時代に思索した人であり、その著作のなかにも「夢」への言及は数多くみられる。しかし、時代の影響は受けていることは確実でありながらも、ベルクソンの夢についての思考、ひいては記憶についての思考は、容易に心理学史や精神分析学の歴史と接続して理解できるものではないように思われる。本稿は、ベルクソンの夢をめぐる思考を、その背景にある記憶の理論とともに理解しようとする試みである。

ベルクソンの「夢」についての思考について知ろうとしたとき、もつともよく参照されるのは、一九〇一年に行われた講演をもとにした論文、「夢」であるだろう。のちに『精神のエネルギー』に収録されたその論文でベルクソンは、徹底して夢から不可思議さを取りさり、夢を誰にでも理解可能なものにしようとしているように見える。ひとは睡眠時の夢のなかで、現実に存在していない錯覚をみていると考えているが、しかし「感覚できる物質が、目覚めているときと同様に寝ているときにも、視覚や聴覚や触覚等々に対して与えられているのではないですか」(ES 85)とベルクソンは講演の冒頭で聴衆に問いかける。睡眠時の夢は、覚醒時にひとがそのときどきの状況を知覚するのと同じように、寝ながら受けとっている諸感覚に対して、記憶が結びつくことによって生じるものとするのである。夢をみる基本的なメカニズムは、覚醒時に現前の光景を知覚することと変わらない。だから、夢の誕生には何の不思議もないのです」(ES 97)。

この知覚と夢をめぐる思考の背景にあるのは、一八九六年の主著『物質と記憶』で示された記憶と知覚の理論である。同書の記憶理論の核心部ともいえる逆向きの円錐の図版のなかには、「夢の平面」という概念が登場している。ひとが経験してきた過去のすべてが保存される純粹記憶の平面を、ベルクソンはそう呼ぶ。夢の平面は、行動の平面の対極にあつて、人間の精神における記憶の働きの重要な一極をかたちづくっているのである。この

ことは、ベルクソンが記憶ないし人間の精神について考えるさいに、夢をけつして瑣末なものとして扱っていなかった、ということを示していると考えてよいだろう。『物質と記憶』における精神のありかたを考える上で、「夢」が同書でどのような位置づけを与えられていたのかということは、明らかにする必要がある課題である。

本稿では、『物質と記憶』における夢の記述を追うことで、同書で「夢」がどのような位置づけを与えられていたのかを確認し、それがベルクソンの思想のなかでどのような意義を持つものであったかを考察したい⁴。そのことを通じて、一九世紀末という時代状況のなかで、ベルクソンが展開した思考の特異性と意味を考える基礎を見定めたいというのが本稿の目論見である。

1 現実と夢——『物質と記憶』における「夢」の理論

本節では、『物質と記憶』において「夢」がどのように論じられているかを確認する。夢についての議論を追うに先立って、まず、記憶についての理論を簡単に確認する(1-1)。夢は同書において、記憶と深い関わりをもつからである。その上で、その理論のなかで夢が現実と対立するものとして論じられていること(1-2)、そしてベルクソンがイマージュ記憶の全体を「夢の平面」と呼んでいることを確認する(1-3)。

1・1 夢と記憶

「夢」はベルクソンの記憶理論のなかでどのような位置をもっているのか。それを理解するためには、記憶の二つのあり方を確認しておく必要がある。ベルクソンは『物質と記憶』の第二章で、記憶が保存されるしくみを

二つに分けて論じている。身体的な習慣を形成する運動性の記憶と、経験したことがそのまま蓄積されていく像（イマーージュ）としての記憶である。

前者の運動性の記憶は、ひとが何度も同じ動作を繰り返すなかで「身体のみで可能な再認」(MM 100)となる記憶であり、「過去を利用する運動機構」(MM 94)ともいわれるものである。この記憶力が活用されている例としてベルクソンが挙げているのは、学課の暗記である (MM 83ff)。何かを学習するさい、暗記するために何度も朗読を重ねることによって、身体的な「メカニズム」が形成される。それはつまり、学課の記憶が、「最初のはずみが全体を揺り動かすメカニズム」、あるいは「同じ順序で動き、同じ時間だけかかる、自動的な運動の閉じたシステム」へと蓄積されるということである (MM 84)。その蓄積が、身体的な習慣をかたちづくっていく。だから、前者の記憶は「記憶によって光をあてられた習慣」(MM 89)とも呼ばれることになるのである。

他方で、後者のイマーージュとしての記憶は、私たちが生きていくなかで経験するさまざまなできごとが、記憶の像（イマーージュ）として、すべてがそのまま記憶されるといえるものである。それが「イマーージュ記憶」である (MM 94)。それは「自発的な記憶」(MM 93)または、「個人的な像としての記憶 (image-souvenir)」(MM 94)等々と呼ばれ、そのできごとが生じた瞬間に「ただちに完成されている」(MM 88)。ひとが普通「思い出」として思いうかべるような、特定の思い出や、出会った人の顔や名前、出会った状況の記憶などが、この後者の記憶にあたる。この記憶イマーージュの再認は「気まぐれに発現する」(MM 94)のみである。その気まぐれさのゆえに、この記憶は「どこか夢のようなところがある」(ibid.)といわれ、その再認は「精神の知性的な均衡を深く攪乱しないで済むことはまれ」であるとされるのである (ibid.)。私たちが追いかける「夢」は、このように、イマーージュとしての記憶の再認に関わって、『物質と記憶』において登場してくるのである。

1・2 現実の対義語としての夢

では、なぜ、イメージジュとしての記憶の再認は「夢のよう」だといわれるのだろうか。素朴に考えれば、それは現実とは関わりがないということを示しているよう。夢を現実と対立するものとして論じることそれ自体は、ベルクソンの理論に特有のことではないように思われる。しかし、その一般的な用法の背景には、「現実」と記憶との関わりについてのベルクソン固有の論点がある。まず、現実とは、なによりも或る人間が目下生きている現在の状況を指している。ひとが生きていくということは、自分が直面している現在の状況に合わせて、身体を適切に動かしていくことの連続である。人は運動を反復することで、先に見たメカニズムを構築し、習慣を形成していく。習慣を形成していくことで、ひとは現在の状況に「適応」していくことができる。この適応が「生の一般的な目的」であり、「だから、生きること満足している生命体は、それ以外のものは必要としないであろう」(MM 89)とベルクソンは述べている。つまり、イメージジュとしての記憶は、現実を生きていくということに対して過剰なものであり、使いみちのないものということになる。

では、その使いみちのないイメージジュは、どうやって再認されることになるのか。ベルクソンはそのいきさつを次のように述べる。

「イメージジュとしての記憶の再認は」せいぜいのところ、現在の状況との関連を欠いた混濁した諸記憶が、有用になるように結びつけられた諸イメージジュからはみ出しているだけのこと、その諸記憶は有用なイメージジュの周りにほんやりとした縁どりを描き、その縁どりは広大な暗がりのなかへと消えていってしまふ。しかし、脳によって外的刺激と運動性の反応のあいだに維持されていた平衡が、なんらかのできごとによって狂わされてしまったときには、末端から中枢を経由して末端へとつながる糸の緊張がほんの僅か

のあいだ弛緩し、そうなるとすぐさまぼんやりしていたイマージュが光のあたるなかにせりだしてくる。この最後に述べた条件が、おそらく、われわれが夢をみている睡眠中に実際に生じていることなのだろう。

(MM90)

現在の状況を生きるひとは、自らの身体の運動に有用な記憶のみを、現在の状況と結びつけて行動している。それ以外のイマージュとしての記憶は、そばにはあるが「ぼんやりとした縁どり」となり、はつきり思いだされることは、通常はない。しかし、外界の刺激に対して運動を返す神経系の緊張が「弛緩」し、保たれていた平衡が崩れたときには、ぼんやりして暗がりにあつた記憶イマージュが、意識の「光」のあたるところへ出てくる。つまり、はつきりと思いだされてくるのだ。この、現在の生活の関心から離れて弛緩するという状態がもつともわかりやすいのが、睡眠中であるとされる。私たちがよく知っている、睡眠中に見る「夢」は、現実の状況に適応しようとする精神の緊張、ベルクソンの言葉でいえば「生活への注意」(MM193)が途切れたことよつて生じてくるものである。だから、夢のイマージュは、「私たちの意志とは独立にあらわれては消えてゆくもの」(MM90)といわれることになってゆくのである。

以上のように、『物質と記憶』において「夢」は、現実に対置されるものであり、現実への正常な適応が困難になつたときに生じるものだと考えられている。

1・3 夢のありか——逆円錐の図における夢

夢みることは現実を生きるための役には立たない。そうであるとするなら、どうして夢は、そして、夢の素材となるイマージュ記憶はあるのだろうか。

ベルクソンは、イマージュとしての記憶を保存する自発的な記憶力は、私たちの日常の生のあらゆるできごとを、「それが起こった順番にそつて」保存していくものだと述べている (MM 86)。イマージュ記憶は、起こった順番に「その場所やその日付も与えられ」(ibid.)て保存されていく。つまり、ひとが生きているなかで経験するあらゆるできごとが全て自動的にイマージュとして残存していくとベルクソンは考えていた。自発的な記憶力は「保存することにかけては誠実」(MM 94)であるが、「再生することにはうつり気」(ibid.)なものだ。

そのイマージュ記憶と、習慣的な記憶とを表した図が、『物質と記憶』における最も有名な図である逆向きの円錐の図 (MM 169) である。逆向きの円錐 S A B は「私の記憶力のうちに蓄積された諸記憶のすべてをあらわすもの」として導入される。この図においては、ベルクソンが分けていた二つの記憶のうち、イマージュとしての記憶、すなわち「純粹記憶」が底面 A B を担い、現在の世界の表象である平面 P に接する頂点 S では、身体に染み込んだ習慣的な記憶が、感覚ー運動システムを構成する。円錐の底面 A B は、「過去に座を置き、不動」であるのに対して、頂点 S は、「たえず私の現在をかたどり、やむことなく前進し、またつねに、私の現在の世界についての表象である動く平面 P に接している」(MM 169)。底面 A B が示す、「真の記憶」すなわちイマージュ記憶のひろがりには、「意識のひろがりと外延をひとしくしている (coextensive à la conscience)」(MM 168)。つまり、逆円錐の図像が示しているのは、「記憶のすべて」であり、それが現在と過去のあいだにひろがる意識とひとしいものなのである。

では、この二つの平面的あいだで、ひとはどのように生きているのだろうか。「記憶力の恵まれた性質」(MM 170)によって、二つの記憶力がうまくバランスをとりながら機能している場合、そのひとの精神は「よく平衡のとれた」精神であるとされ、その持ち主は「生に完全に適合した人間」(MM 170)であるとされる。しかし、現実を生きるために機能する感覚ー運動系のシステムのバランスが崩れた時、ひとは、一方ではイマージュとしての

記憶をまったく使わず、習慣的な記憶のみで現在に対処していくことになり、そのとき「衝動的なひと (impulsif)」と呼ばれる。他方で「過去のうちに生きて、そこで生きることと欲びとするようなひと」、つまり「目下の状況に何の利益もないのに数々の記憶が意識の光のもとに浮かびあがってくる」(MM 170) ようなひとは、「夢みるひと (rêveur)」と呼ばれるのである。「衝動的なひと」も、「夢みるひと」も、どちらも、現実の状況にうまく対応することができない状態の人間である。ベルクソンはそれを次のように述べる。

自分の現実存在を生きるかわりに、それを夢みている人間は、おそらくはこうして、すべての瞬間において、過ぎ去っていった自分の物語の無限の細部を、自らのまなざしのもとにとどめておくことだろう。反対に、この記憶を、そこから生じてくる一切のものとともに放棄する人間は、絶えず自分の生活を、それを真に表象するかわりに、演じていることだろう。(MM 172. 傍点による強調は原文のイタリックを示す。)

自分の現実存在 (son existence) を、「生きる」こと、「夢みる」こと、そして「演じる」ことという、三つの態度のとりかたがここでは述べられている。「生きる」ことが、現実の刺激に合わせて運動を適切に返す「平衡のとれた」ひとのやっていることであるとすれば、「夢みる」ことは、自分の現在の状況に目を向けず、ひたすら過去の記憶に目を向けるひとのやることを指すだろう。その想起が過剰であるために現実の状況に向かうことができないひとが「夢みるひと」である。現実の状況にあわせて行動することから離れて、「夢みられている心理的生活 (l'existence psychologique [...] « rêvéer »)」(MM 186) にひとが身を移せば、そこには「われわれの流れ去った生のできごと」の、どんな小さな細部に至るまでの一切が描きだされている「(bidé)」。その過去をひとつずつ思いだし、そこに感傷してしまうひとが、夢みるひとなのだ。その一方で、自分の生活を「演じる」こととは、

過去を一切顧みることなく、ただ身体的に身についた習慣を「自動人形のように」(MM 172) 反射的に繰り返すことを意味している。「演じる」ことと「夢みる」こと、両者はともに、現実を「生きる」こととは異なる態度なのである。

『物質と記憶』一八一頁でもう一度円錐を示しながら、ベルクソンはつぎのようにいう。

われわれがA Bのほうへと散らばっていく傾向をもつのは、自分が感覺的で運動的な状態から離れていき、夢の生を生きるようになるにつれてである。他方、われわれが自らをSのほうへと集中させていくのは、われわれがよりしっかりと現在の現実結びつけられて、感覺性の刺激に対して運動性の反応を返していく、その限りにおいてのことである。(MM 181)

逆向きの円錐という図像を経由することで、「夢みること」と「行動すること」(生きること)「は、精神を過去に振り向けるか、現在の行動に振り向けるか、精神が向かう方向を示す言葉として、対となる意味をもつものとなっている。身体が位置する平面Pと、純粹記憶の底面A Bとされていた二つの平面が、「行動の平面」と「夢の平面(plan du rêve)」(MM 192)と呼ばれることになるのは、精神の運動の方向を示すためであると考えられる。ただし、二つの平面はあくまで極端なものであり、正常な人間がそのどちらかの平面に至りつくような精神状態になることはないとベルクソンはいう。多くのひとはその二つの平面のあいだで、現実の状況に合わせて記憶を収縮させて適切な反応を返すことができている。それが、「記憶力の恵まれた性質」(MM 170)なのだ。だからこそ、私たちは過去の世界にとらわれることなく、現実の生活を適切に送ることができるのである。

「夢みること」は純粹記憶の方向に向かつていく運動であり、睡眠時にみる「夢」や、夢みるような想起も、現実に対応する緊張感が弛緩したときに生じてくるものであるとされていた。どちらも、現実を生きることに對しては、注意が欠けた状態であり、そのとき必要のないイマージュ記憶が過剰に出てくる状況である。現実を十全に生きるといふことを主眼においてみれば、夢や想起はそこから外れた活動であるといえるだろう。とはいへ、現実をつつがなく生きている人間であつても、夜の眠りのなかで夢をみたり、白昼ふとした瞬間に過去のできごとことに思いを馳せたりすることはある。そうしたいとなみは、どのようにして生じてくるのだろうか。そのいきさつを、節をあらためて詳しくみていくことにしたい。

2 想起と夢——それぞれのメカニズム

『物質と記憶』における記憶の理論のもとで、「夢の平面」は、現実とは対極にあるものとして描かれていた。精神が現実を離れて過去の記憶へと向かう運動は、大きく分けるとふた通りに描かれているように思われる。ひとつは、一般的な意味で「夢」といったときに指示されている、睡眠時において夢をみることであり、もうひとつは、現実から離れて過去の記憶を想起することである。本節では、その二つの「夢」の運動を、順に確認しておくことにしたい。まず、睡眠時の夢がどのように生じてくるのかを、『物質と記憶』の六年後に行われた講演をもとにした論文「夢」から再構成してみたい(2-1)。そして、もう一つのはたらきである「想起」することについて、それがどのように生じてくるのかを確認する(2-2)。

2・1 睡眠時の夢はなぜ生じるのか——論文「夢」における夢の説明

ベルクソンは、『物質と記憶』の出版後から五年後の一九〇一年五月に、自らも関わっていた心理学総合研究所 (Institut général psychologique)⁷ において講演を行っている。「夢」と題されて、のちに自選論文集『精神のエネルギー』に収録されることになるその講演においてベルクソンは、ひとの睡眠時に夢があらわれてくるメカニズムについて説明している。

潤沢な例示や比喻に彩られたこの講演における、ベルクソンの主張の骨子をひとことで取りだすならば、本稿はじめでも触れたように、夢は、眠っているあいだに感覚器官が受けた刺激に対して、イマージュ記憶が結びつくことで生じてくるものである、ということになる。ひとの感覚器官は、眠っているときにも働いており、外界からさまざまな刺激を受けとっている。たとえば、閉じている瞼ごしに光を感じたり、音を聞いたり、身体が寝具や肌着に触れたり、といった刺激がそれである。それに加えて、身体の内部分から生じる「内部感覚」(ES 91)があり、それは耳のなかで生じるうなりや、内臓の感覚であるとされる。そうしてやってきた漠然とした感覚に、記憶が形を与えることで、夢が作られる、とされるのである。

〔引用者注：私たちが眠っているあいだにもつ〕感覚は、温かく、彩りがあつて、振動もあつて、つまりほとんど生きています。ほんやりしています。記憶はといえば、はっきりと明確ですが、中身がなく、生命を欠いているのです。感覚は、自らの曖昧な輪郭を定めるために形相をまさに探しとめています。記憶のほうは、自らを満たして、いっばいにする⁸ことで最後には現実化するために質料を得たいと思つているのです。だから両者はお互いに惹きつけあつて、そしてまぼろしのような記憶は、記憶に血や肉をもたらず感覚によって物質化し、ひとつの固有な生を営む存在に、つまり、夢となるのです (ES 97)。

だから、夢は、起きている時の現実世界の視覚像とほとんど同じように作られる、とベルクソンは述べている。「夢の誕生には何の不思議もない」(ES 97)と言われるのは、夢がこのように、受け取った刺激に対する反応という覚醒時の知覚と変わらないメカニズムで生じてくるからにはかならない。ただ、覚醒時の知覚と異なるのは、行動の要請が差し迫っていないということである。起きているときには、ひとは現在の状況に対して何らかの反応を常に返していかなければならないため、受け取った刺激に対して、行動の役に立つ記憶を結びつけて知覚を作り出す。他方で、眠っているときは、現在の状況に対して行う反応への切迫がより少ない。夢は「心的生活の全体から、集中する努力を引いたもの」(ES 104)なのである。それゆえに、受けた刺激に対して、起きているときよりは自由に記憶が結びつくことになり、空を飛ぶ夢(ES 90)や、講演しているときに聴衆に責め立てられるような悪夢(ES 101-102)など、荒唐無稽なイメージや、過去にはあらわれたことがないような状態が、夢のなかに再生されることになるのである。

2・2 夢みる「努力」——想起と思考

底面A Bでひしめいている無数のイメージ記憶が、現在の意識のうちに再生されてくることは、先に見たように、何らかの仕方での現実の必要性から離れることでしかなされない。その、現実の必要性から離れるということが「夢の生を生きる」(MM 181, 本稿一一七頁)ことであるといわれていた。ヘルクソンの考えでは、「夢の生を生きる」ことは、眠ることだけを指してはいない。それは次のような引用からも明らかである。

この二つの記憶力——思いえがく記憶力と、反復する記憶力——については、後者の反復する記憶力が前者の記憶力を補完することもあり、またしばしば前者であるかのような錯覚を与えることさえある。或る

犬がその主人を喜びの吠え声やじゃれつきで迎える時、犬は主人を再認していることは間違いないだろう。「…」〔主人をみたとき〕その動物自身においては、過去のほんやりしたイメージがおそらく現在の知覚から溢れ出しているだろう。ひとは犬の過去の全体が、犬の意識に潜在的に描きだされているのだと考えさせるかもしれない。しかし、この過去は、犬が関心をもつ現在から犬を引き剥がすほどの力はもたないのであって、その再認は考えられたというよりはむしろ生きられたものであるはずである。過去をイメージの形式のもとで呼び覚ますためには、現在の行動から身を離すことができればならないし、役に立たないものに価値を与える術を知ってはいなくてはならないし、夢みることを望まなければならないのである。おそらく人間だけが、この種の努力をすることが可能なのである。(MM87)

犬の再認は、「考えられたもの (pause)」であるというよりは「生きられたもの」であると言われていることに注目しておきたい。ここで「生きられた」と言われているのは、犬があくまでも現在の状況を生きたことへの関心に基づいて主人を再認している、ということであるだろう。犬が主人を再認するのは、あくまでも現在その主人と関わりたいという現在を生きたという動機に支えられている。その一方で、現実から身を引き離すことは、人間だけに許された努力だとベルクソンはみていた。ひとが現実から身を引き離せるということは、現在を生きたための「生活への注意」が一時的に緩む状態にすることであるだろう。それができない犬の状態をひきあいに出したうえで、ベルクソンは、「夢みることを望むこと」、「現実から身を離すこと」、「役に立たないものに価値を与えること」は、人間だけに可能な「努力」であると述べているのである。この努力は、いったいどのようなものだろうか。

ベルクソンは、「われわれの人生の一時期を思いだす場合」にどのようなことが起こるのかについて次のよう

に述べている。

われわれは現在から身を引き離して、まずは過去一般に自ら身をおいて、ついで過去のなんらか一定の領域に身をうつしていくという独特の働きを意識する。それは手探りの仕事であって、写真機の焦点を合わせることも似ている。けれどもわれわれの記憶は、まだなお潜在的な状態に留まっているのである。われわれは、このように適切な態勢をとりながらも、その記憶を受け入れる準備をしているだけである。少しずつその記憶は霧のようにあらわれてきて、それが凝縮されていく。記憶は、潜在的な状態から現実的な状態へと移行していく。そして、その輪郭が描きだされ、表面が彩られてゆくのに従って、われわれの記憶は知覚を模倣しようとしていくのである。(MM 148)

自分の人生の一時期を、ひとが意図して思いおこそうとするということは、潜在的な状況にある過去のなかで「写真機の焦点合わせ」のように少しずつ記憶を現在のものにしていくという「手探りの仕事」であると述べられている。身体に染み付いた習慣としての記憶とは異なり、イメージのかたちで記憶を呼び起こすことは、努力を必要とすることなのである。「夢をみようとする努力」とは、この手探りの思いおこす努力を指していると考えられる。

では、イメージの形で過去を呼び起こすというこの努力は、ひとに何をもたらすのであろうか。この問いを考えるためには、人間の思考に固有なことを論じた箇所が、手がかりを与えてくれると思われる。

アプリオリにみて、じっさいのところ、個別的な対象を明確に区別することは、知覚にとっての奢侈とい

うべきもので、それは一般観念の明晰な表象が知性による洗練であるのと同じであるように思われる。類を完全なしかたで捉えることも、もちろん人間の思考にとって固有なことがらだろう。そのために要求されるのは反省の努力であって、その反省を介して私たちが、表象から時間と場所の特殊性を拭いさるのだ。とはいえしかし、そうした特殊性をめぐる反省——つまり、それが欠けているところでは、対象の個性が私たちの目からすり抜けてしまうような反省——が前提としているのは、差異に注目する能力、したがってまたイマージュに関わる記憶であって、それは疑いもなく人間と高等動物の特権なのである。(MM176)

引用した箇所は「一般観念」の把握のしくみを論じる文脈であり、ひとの認識は、個別的なものを捉えることから出発するのではなく、一般的な類から出発するのではなく、その「中間的な認識」(MM 176) から出発しているということを説明する箇所である。その議論に詳しく入りこむことはここではできない。確認しておきたいのは、個別的な対象を区別することは、イマージュ記憶があることを前提としていて、その記憶が人間と高等動物の特権だと言われていることである。

知覚にとっての奢侈とはどういうことか。ひとは、現在の状況下で行動することだけを考えるならば、目の前の事物のひとつひとつを個別のものとして認識する必要はない。上の引用での言葉では、「類」を捉える反省が働いていることで、日常の殆どの行為は果たされることになる。たとえば、ひとが日常昇り降りする階段は、どれもそれぞれに少しずつ異なっているが、「階段」だということ捉えさえすれば、ひとは適切に然るべき足から踏み出し、それを昇り降りすることができる。日常の行為を遂行するのに必要なのは、目の前の対象に対して自分がどう振る舞えばいいかが適切に把握されることであり、その把握が、私たちに知覚される表象である。それゆえに、たとえば階段ごとの特殊性を認識することは、知覚にとって過剰であり、不必要なものなのである。

しかし、もう一つの反省、特殊性や個性を捉える、差異に注目する反省も、人間は行うことができる。特殊性を捉える、ということは、過去に自分が経験した事物とくらべて、眼前のものがどう違うかを把握するということである。そうであるとするなら、過去に自分が経験したことが、細部をも伴って再現されることがなければ、特殊性を捉える認識も作動することがないと言えるだろう。その認識は、行動にとつて「役に立たないもの」ではあるが、それが可能になるのは、イメージ記憶があらゆる細部とともに保存されているからなのである。そうしたイメージ記憶の完全な保存と、その想起が、人間だけに可能な現実から離れた思考の、礎になっているのである。

このように見てくると、論文「夢」で詳述された、睡眠時の夢については、外界からの刺激を受けて生じてくる表象だという意味では、起きているときの「知覚」と同型的な働きであり、他方、『物質と記憶』で論じられたイメージ記憶を思い起こす想起は、人間らしい思考の可能性の条件になっているといつてよいだろう。どちらとも過去の記憶イメージが現在に再生されてきているという点は同じだが、前者は、眠っているために、生きるための注意が止まっている状態であり、後者は意識的に現実から身を引きはなして、過去に身をおく努力を意識的に行っているという点が異なっている。そして、後者の想起の努力は、人間が個体の差異やできごとの固有性を捉えるための基礎をかたちづくっている。

ひとつ注意しておかなければならないのは、想起の努力を重ねることは、すぐに完全なる想起にたどりつくことを意味しないことだ。現実から身を引きはなす努力が可能であるとしても、ひとは現在を生きていくことから完全に逃れることはできない。

過ぎ去ったイメージは、そのあらゆる細部をもらさず、感じられた彩りにいたるまでそのとおりに再生される場合には、夢のイメージであり、あるいは夢のなかのイメージとなる。われわれが行動と呼ぶものは、この記憶が縮約し、あるいはむしろこの記憶が次第に研ぎすまされてゆき、そのナイフの切っ先だけを経験に示し、そのナイフが経験に入りこんでゆくことを見届けることである。(MM II-6-117)

ベルクソンの記憶理論においては、自分が経験したできごとの数限りない細部を、私たちの精神はいつまでも保存し続けている。その細部や感情的な彩りまでを思いだすことは、夢想でしかありえない。そのとき、睡眠時の夢や夢想は、現実を生きる人間の良識を失った狂気とも接近するものになるのであろう。しかし、過去を想起することの可能性が、人間らしい思考の条件となっているということも本節ではみてきた。夢をみることは、ただ生きることだけではなく、人間として生きることの証左でもありえるのである。⁸

3 夢の領域を確保すること

以上のようにみてくると、ベルクソンは現実を生きるということのほか、過去を詳細に思い起こし、思考するという人間の精神のあり方を、「夢の生を生きる」「夢」という言葉を用いることで描こうとしていたように思われる。では、「夢の生を生きる」とは、どのような精神の働きなのだろうか。本稿の最後に、「夢の生を生きる」とはどういうことなのかを、ベルクソンが言及している例に着目して考えてみたい(3-1)。その上で、ベルクソンがなぜ、過去の記憶を想起することを、「夢」に結びつけて語ったのかを考えたい(3-2)。

3・1 夢の生を生きること

ベルクソンは、『物質と記憶』に先立つ第一主著、『意識に直接与えられたものについての試論』において、「薔薇の香りのなかに思い出をかく」という印象的な一節を記している。この一節は、私たちが確認してきたことと照らし合わせてみると、現実から身を引きはなして、過去に身をおくという、夢みることのひとつの具体例となっているように思われる。

私が一輪の薔薇の匂いをかぐ、するとすぐさま子供の頃の錯雑とした思い出が私の記憶によりみがえってくる。本当のことをいえば、こうした思い出は、薔薇の香りによって思い起こされたものでは全くないのである。私は匂いそのもののうちで、思い出をかく。匂いは私にとって、こうしたことのすべてなのだ。他の人々はその匂いを、違うふうに感じるだろう。——それは相変わらずの匂いなのに、ただ違う観念と結びつけられていただけだとあなたは言うかもしれない。——そんな風に説明してもらってもかまわない。しかし、忘れてはならないのは、あなたがまずもって、薔薇が私たちそれぞれに与えるさまざまな印象から、その個人的な要素を取り除いてしまったことである。あなたは客観的な側面しか、つまり薔薇の匂いのなかで、共通領域に属するもの、言ってみれば、空間に属するものしか、保有しなかったのである。(DI 121-122)

幼少期の思い出は、現在を生きることにさしあたり関係がなかったとしても、なにかをきっかけにして不意にあらわれて、ひとを捉える。おそらく『試論』の薔薇の香りの体験は、『物質と記憶』の記憶論の文脈から捉えなおしてみれば、現在のなかに不意にあらわれる「夢みる」体験であるということができよう。薔薇にまつわる

個人的な思い出は慕わしいものかもしれないし、子供時代の不安や心細さを伴っているかもしれない。いずれにせよ、現在を生きることに必要である以上の感情を、その思い出は伴っていることだろう。

先にみた引用（本稿一二頁）で述べられていた「役に立たないものに価値を与える」とは、対象を個体的なものとして捉え、そこに感情的な価値を見出す、そうした純粹記憶へと向かう運動を指していると思われる。薔薇を、薔薇としてとらえるのではなく、自分自身の思い出をそこに捉える、というとき、ひとは類としての薔薇ではなく、そこに個性をみつけている。「匂いそのもののうちで、思い出をかぐ」という、詩的な彩りを与えられているかにも見えるその表現は、そうした想起のありようをかえって素材に伝えるものであると考えられるのである。そして、その想起を可能にしているのが、「現実から身を引きはなすこと」であり、「夢みることを望むこと」なのだと考えられるのである。

こうした想起の体験は、おそらく多くの人が、多かれ少なかれ体験するものであるだろう。ひとは現実を「生きる」ことのすぐそばに、こうした「夢の生を生きる」体験がある。ベルクソンが考えていたのは、このように二つの側面をもった、人間の生のありかただったのではないだろうか。

3・2 純粹記憶を夢と名指すこと… 私たちは過去と生きている

これまでみてきたことから、ベルクソンが考えている「夢」は、現実の必要性から離れて思考することという、伝統的な「観想」の概念とほとんど変わらないといってよいようにも思えてくる。しかしベルクソンは、「思考」や「観想」といわずに「夢」や「夢みること」という言葉で、純粹記憶に向かう精神のはたらきを表現していた。なぜ「夢」だったのかという問う余地が、まだ残っているように思われる。

その問いを考える手がかりとして、私たちには再び睡眠時の夢に立ち返る必要があるように思われる。次の引

用において、ベルクソンは、夢のなかで過去が驚異的な正確さでもって再現されるという例をあげている。

しかし、自分の過去が、自分にはほとんどまったく隠されたままであるのは、現在の行動の必要性によって過去が抑制されているからであるとするれば、過去は意識の閥を飛びこえる力を、われわれが有効な行動についての関心から離脱することで、いわば夢の生へと身を置いた時に、ふたたび見つけることになるだろう。「…」ところで、ある種の夢やある種の夢遊状態において記憶の「昂進」が見られるのはありふれた事実である。消滅したと信じられていた記憶が、驚異的な正確さでもってふたたびあらわれてくる。われわれは、完全に忘れられていた子供の頃の光景をいつさいの細部にいたるまでふたたび体験することになるし、そして、われわれは学んだことを覚えてさえいない言語を話す。(MM 171-172)

自分の過去は、自分には隠されている。それは、自分が生きていかなければいけない現在の状況が、その時の必要以上には、みずからの精神を過去に向けさせないからである。しかしまた、ひとは夢のなかで、経験したことを覚えてもいないような光景の再現に出会うことがある。ひとが意識して為している現在の生活とは別の、過去の生活がたしかにあり、その上で私たちが生きているのだということに、「夢」は気づかせてくれる。ここで述べられていることを考えると、「夢みること」は、私たちが自分自身の過去に触れるための、ひとつの発見の契機だということができのではないだろうか。ベルクソンは、ひとの「性格」が、その人がこれまで生きてきた過去の経験があらわれたものだと考えていたが、ひとが自分自身の過去を捉え、自分の人生を自分のものとして生きるための、発見の機能が「夢」にはあると考えられるのである。

睡眠時の夢は、ひとの意識にとつて、不随意に与えられてくるものである。ベルクソン自身は、先に見た

一九〇一年の講演でそのメカニズムを合理的に説明していたが、それを踏まえた上で、それでも、私たちの個々の意識にとつては与えられてくるものであり、説明しきれない部分をひとは日々感じていることだろう。自分たちにはわからないどこか遠くから、しかしはつきりと与えられてくる夢は、私たちの意識しえない意識を、意識の外の意識を、私たちに教えてくれるもつとも身近な契機であるといえるのではないだろうか。だからこそベルクソンは、自身の記憶理論のなかの純粹記憶の領野を象徴するものとして、「夢」という名を見出して、それを用いて論じたと考えられる。

結びに代えて

『物質と記憶』において、「夢」ないし「夢みること」という概念のもとで展開される思考は、その基本線においては現在の状況を「生きる」とこと対立する精神のはたらきをめぐるものであったといえる。人間は目下の現実を生きることを離れて、夢をみることに、過去を思いだすことに、思考することを日々行っている。それらを可能にしているのが、ベルクソンの記憶理論における純粹記憶の領域であり、それを象徴する語として「夢」が選ばれていたのではないかと、私たちは考えるに至った。

課題として残っているのは、一九世紀末から二〇世紀という時代の状況のなかで、ベルクソンが純粹記憶の領域に「夢」という語を与えたことの意味を明らかにすることである。『物質と記憶』のなかでは、「夢」という語のほかに、意識の潜在的な部分について「無意識 (inconscious)」という語もまた、用いられている。しかしその無意識には、知覚されていない外界の対象も含まれており (MM 157f)、単純に精神のうちの意識とされていない部分としての「無意識」と考えることはできない。ベルクソンの無意識については、知覚理論との関

連のなかで改めて検討されなければならないだろう。そしてそれは、ベルクソンが人間の自我と外界との関わりをどう捉えていたのかという、大きな問題ともつながっている。ベルクソンが意識の外の意識について何を考え、そのはたらきを今回確認したように「夢」と名指すことによって、どのように人間の意識を捉えようとしていたのかについては、機会を改めて論じることにはしたい。

引用文献

ベルクソンからの引用は、下記の略号を用いて表記した。訳出にあたっては、既存の邦訳に多くを助けられていぬ。

[DI] Essai sur les données immédiates de la conscience, PUF, 2011.

[MM] Matière et mémoire, PUF, 2008.

[ES] L'énergie spirituelle, PUF, 2009.

稲垣直樹 (2007) 『フランス〈心霊科学〉考』、人文書院

マイケル・R・ケリー (2017) 「生への注意 『物質と記憶』における道徳性の進化」(山根秀介訳)、平井靖史、

藤田尚志、安孫子信編 『ベルクソン 『物質と記憶』を診断する 時間経験の哲学・意識の科学・美学・

倫理学への展開』、書肆心水、pp.326-335.

根田隆平 (2015) 「夢の喩えをめぐる——ベルクソン 『意識の直接与件についての試論』を中心に——」、『二

松学舎大学論集」第58号所収

杉山直樹 (2013) 「意識の他者／他者の意識——フランスにおける心理学と無意識（一八八〇―一八九年）——」 「思想」 (No. 1068)、二〇一三年四月号、岩波書店

高橋滯子 (2016) 『心の科学史 西洋心理学の背景と実験心理学の誕生』、講談社

註

- 1 高橋 (2016) は、一九世紀ドイツにおける実験心理学の誕生について、ヴント、ヘルムホルツといった中心的人物たちの学的遍歴から思想的な背景、学界の形成にいたるまでを詳細に描き出している。
- 2 杉山 (2013) は、一八八〇年から一八八七年に照準を絞り、フランスにおいて無意識の概念をめぐる思考がどのように思考されてきたかを論じている。また、一九世紀のフランスにおける「心靈科学」の思想的背景については、稲垣 (2007) 第一章が詳述している。
- 3 ベルクソンからの引用箇所は、引用文献一覧に示した略号に、PUFのQuadrige版の頁数を付して表記する。
- 4 ベルクソンの「夢」の議論をめぐるのは、根田 (2015) が、『物質と記憶』に先立つ著作である『意識に直接与えられたものについての試論』（以下『試論』と略記）における夢の喩えを中心に分析し、それらが同書における意識や持続の観念を理解するために役立つ比喩であることを明らかにしている。根田の指摘するように、「夢」は『試論』の段階から、すでにベルクソンの思考において重要なモチーフであり、相互浸透する意識のありかたを理解するための有効な比喩としての役割を見出されていたといえるだろう。本稿は、

『試論』の段階ですでにベルクソンによって見出されていた「夢」の性質が、『物質と記憶』において自身の記憶理論が精緻化されていくなかでどのような位置づけをもつようになったかを、明らかにしようとする試みである。

5 覚醒時と睡眠時の違いについては、本稿第二節で詳しくとりあげる論文「夢」においても述べられている。覚醒と睡眠の違いが、神経系の緊張と弛緩であるという主張の基本線は、『物質と記憶』の六年後になされたこの講演でも変わらぬが、心的な機能(知覚、記憶、推論)は覚醒時も夢においても変わらずに働いていることが強調されている。夢と覚醒とを隔てるのは、その記憶の現在の状況に対する「適合の正確さ」(a précision de l'ajustement)への努力の有無だと述べられている。(cf. ES 104)

6 ただし、「夢みる」度合いが高くなり、現実を「生きる」ことからあまりに乖離していった場合、それは精神の錯乱や、狂気と近接するものともなる。以下の箇所の記述を参照。「そこで緊張が弛緩し、その平衡が断ち切られるとしてみよう。そのとき、一切は注意が生から剥がれ落ちたかのように生起することだろう。夢と狂気(alienation)は、それ以外のものではないようにみえる。」(MM 194) / 「ところで、夢はあらゆる点で狂気を模倣している。錯乱(jaolie)の心理学的な症候の一切が夢においてもみられる——この二つの状態を比較することはつまらなくなってしまったほどだけれど——だけではなく、狂気もまたひどく、脳の衰弱に起源をもっているようにみえる。脳の衰弱は、通常の疲労と同じように、何らかの特殊な毒素が神経系の要素に蓄積することによって引き起こされる。」(MM 194)。

7 「心理学総合研究所」については、『精神のエネルギー』にMadelrieuxとWaterlotによって付された注を参照 (ES 278-280)。

8 ケリー (2017) は、夢をみようと努力するひとは、「道具的で目的論的に制限された、行為と単なる自己利

益の世界を超克している」とし、夢をみようと思志することが、人間の道徳的進化を可能にしてきたと論じている（ケリー 2017, pp.348-349）。夢が人間らしい思考の契機になると主張する本稿にとっても、ケリーの指摘は非常に重要なものである。

『物質と記憶』における性格と過去の関係については、たとえば次のような箇所を参照。「私たちの過去の心理学的な生は、全体として、私たちの現在の状態を、必然的な仕方での決定なしに、条件づけている。また、全体として、過去の心理学的な生は、私たちの性格に、表れ出ている。それは過去の諸状態が、性格において明確に顕現しないにしても、そうなのである。この二つの条件は、結び付けられて、無意識的であるとはいえある実在的存在を、過去の心理状態のそれぞれに確保してくれる。」(MMI65)